

第二章 六回目の脱獄行

1

昭和十六年十月二十九日に、白岩由吉は、秋田刑務所に移送されている。

軍関係の作業を行なわせるための人員確保で、彼もそのうちの一人に入れられた。

昭和十一年に準強盗致死、窃盗、住居侵入、建造物侵入、逃走などの罪がつき無期懲役刑が確定した。

宮城刑務所から小菅刑務所に移されたのち、彼は秋田刑務所に送られたのであった。秋田刑務所に送られるまでのほぼ一年間、彼は東京・小菅刑務所では成績優秀者として何回か表彰された。

白岩由吉は、秋田刑務所に移送されることでふるさと青森に近くなることを喜んだ。構外作業に出されれば、東北の地の空気を胸一杯吸うこともできると考えた。

だが、秋田刑務所側は白岩由吉の犯歴簿、逃走歴などを見て、この男が厄介者で、この地までタライ回しにされてきたことを知った。

そのように判断した。

入所したその日に、白岩由吉は、いきなり、鎮静房に入れられた。

鎮静房とは、服役規程に反した者を一定期間を定めて監禁しておく特別の施設のことである。赤煉瓦塀の内に入り、周囲を見回す暇もないうちに、白岩由吉だけ、鎮静房に投げ込まれた。

たった一つ、目撃したのは、反則者の一人が所長室に連れて来られた時、相当ヤキが入れられたと見えて、半死半生の有様であつたことだけだつた。

男はただ首垂（うなだ）れていた。

新入りの者に、「お前たちも反則を犯せばこうなる」と、教えるための下手な芝居のように白岩には思えた。

東北管区では、宮城刑務所と共に、秋田刑務所は施設の優秀さを誇っていた。

建物敷地が一万一千余坪、耕耘地三千八百余坪、フランス中央監獄の施設を模したもので、文明開化の政策の一環として、この他にも、千葉、甲府、三重、奈良、福岡、長崎などが五つの放射状のかたちの獄舎を持っていた。

入所初日から、白岩由吉は最重要警戒人の一人に加えられた。

やはり、脱獄常習者の烙印（らくいん）は、ここでも消えることはなかったのである。もう一つ、運が悪いことに、大曲支所での構外作業中に、看守三名が襲われ、集団脱走が一カ月前に発生していた。

やはり秋の穫り入れどき、雪深い秋田の地も、秋口が脱走時期なのだった。刑務所側も用心していたのだつた。

当初は刑務所側も寒くなるまで、お客さん扱い^でしておけば逃げる意欲も失なうだろうぐらいに考えていた。

豪雪地帯だから、逃げても命は保障されないのだった。だが、いきなりの鎮静房入りに白岩の持前の反抗心が頭をもたげた。

「おめえだち、おらさ逃げられるのがおっかねはんでこしたどごさ、入れだな！」

怒鳴り声をあげたが看守には無視された。食事は一日に二回だけ、手錠はされなかったが、この懲罰房は堅牢な造りであった。

蟻一匹這い出ることができないほどの頑丈さである。周囲は厚い鉄板で囲われていた。

たった一つの救いは、天井の明り取りの窓が遮蔽されていなかったことである。だが、その天井の高さは優に二メートルはあった。

なにより、舎房の狭さに参った。人間が一人座っていられるだけの広さで、畳一枚分あるかないかのスペースしかなかった。

毛布は与えられず、横になつて寝ることも許されていない。一日正座していなければならず、二度の食事時に、二十分間だけ、膝を崩すのが許されるだけだった。

が、彼は耐えた。どうせ、十日もすれば、出してもらえる―それで、規則どおり、正座で通した。

鎮静房は、明治の頃は、「一回一房」の考えがあり

、独居房の型態を取った。中は完全に光が閉ざされた。そのために、「闇堂」と言われ、怖れられた。江戸から明治にはじめにかけては

獄内規則を犯した者は、七昼夜、水のみが与えられたという。十一月に入っていた。東北の地はシベリアからの季節風が運んできた雪が舞っていた。秋田市の北側に位置し、また、日本海沿岸ともそれほど離れていないので、ここは、風雪の厳しいところであった。また、重罪犯を収容する刑務所だったので、看守も猛者連が多かった。取り扱いの苛酷さに加えて、これからの冬の季節の到来である。

鉄板囲いだから、冷気が身にこたえた。

看守と口をきく機会は、朝の点呼だけ、外に出されるのは、木桶の便器の排泄物を、雑役夫が運んできた台車の上のドラム缶に自分で捨てる時だけだった。

明り取りの窓は、半分ほどしか開いていない。すでに、空は灰色の雲に覆われていたから、白光とて入り込まなかった。

昭和十六年十二月八日の日米決戦の火蓋が切られた日も、彼はこの鎮静房の中にいた。急に、所内は慌しくなり、活気が充ちた。看守に彼も、真珠湾奇襲攻撃の大成功の話をかされた。その若い看守は、二週間も経たぬうちに、召集を受け、秋田刑務所を去った。戦時態勢のために、一層に、囚人への締め付けが厳しくなった。食べ物の質が極端に悪くなった。

戦地へと戦略物資は最優先で送られた。

「穀（こく）つぶしめが！」囚人たちは毎日のように、看守に罵られた。

「おい。水だけで、何日生きられるかやって

みるか。食うや食わずで戦っている将兵のこ
とを考えたことがあるか。鉄板囲いじゃ、弾
も飛んでこんしな」

ある日、担当看守が彼に毒づいた。

「おら、こしだどこさ放り込まれる覚えねえ
どう。なあ、担当さんてば。小菅刑務所の元
木所長さ、手紙書ぐはんで、紙と鉛筆ごと貸
し手けねべがあ」

「なんだと！おめえなんか口をきける相手
ではなからうが」

「こごの、でえ扱いごとば、おら、直訴する
んだ」

「馬鹿つたれが！。おめえ、気でも狂ったじ
やないのか」

「よし。いつまでもこしだどこさ。放り込ん
でおぐ気だば、おら、脱獄すはんでなあ」

「ふん、やれるものならやつてみる。まさか、
おまえ、鉄板をよ。爪でほじくって、穴が開
けられるわけでもないだろうが。大口叩くも
んじゃねえ！」

「おらだば、弱いもんいじめする奴ごと、許せ
ねえつ。絶対に、鉄板さ穴あけてみせるはん
でけなつ」

この時も、担当看守に、彼は脱獄宣言をや
つてのけた。即日、天井の遮蔽幕が閉じられ
、一寸先も見えない闇になった。

完全な「闇室」になっていた。

真っ暗闇になると、余計に冷気が身に染み

た。骨の髄まできりきりと寒さが切り込んでくる。歯の根が合わず、明け方などは、膝頭までがくがくと震えた。看守の残したことが、いつも、頭を離れなかった。

『戦争に勝つまでその中に置いてやるよ。冬になると零下十度だ。生きながらにな、凍って体が、こちこちになっってしまう。だがな、始末書じゃ、雪ん中の行き倒れだ。死ぬときは眠くなっとな、とつても気持ちいいそうだ。夏はな、天窓を全開にしてやる。鉄板が焼けてな、蒸し焼きだ。木乃伊（ミイラ）みたいになっただけ死んだ奴だっているんだぞ』
畳一枚の細長い居房だった。

彼は生き残るために、狭い空間を利用して、手足を動かし、逆立ちをした。暖をとるためにも体を動かす必要があった。

青森署支所の各留置場から飛びつちよしたのがこれまでに四回、青森刑務所から脱獄したのが一回、すでに彼には五回の脱獄歴があった。

窃盗犯で捕まるたびに、彼は土蔵の錠破りの特技を生かして、大抵は針金一本で留置場の鍵を開け逃げた。

みんな木造建築の建物である。針金がないときは、壁や床の羽目板を外し、釘を手に入れた。

それに、逮捕されたときは、身体検査される前に大便所に入り、いつも所持している針金を丸めて口中に含むか、油紙で包んで肛門に隠した。油断していて針金を所持していなかった時は、取調中に壊れかけた

木椅子の釘を引き抜き利用した。釘ぐらいなら彼は強い顎の力を利用して歯で抜いてみせることなど朝めし前のことだった。

ともかく、針金様のものがあれば、どんな錠前でも彼は解錠した。

「こんなとご、いつでもおら逃げてやる！おらをなめんねっ」

そう看守相手に豪語したものの、闇室では、この鎮静房の弱点を探るわけにはいかなかった。

が、ある日、彼は闇の壁を探っているうちにふと閃めいた。

冷めたい鉄の壁が、長い年月を経ているので表面が錆びついていることに気付いたのだ。

同時に彼は蟹工船仲間の男に聞かされた話の一つを思い出していた。

カムチャツカの海で母船同士が接触事故を起した時、ある機関員の男は、絶対脱出不可能の船底から這い上り、命が助かった。船底にいた男たちは、この時、完全に逃げ遅れた。左舷に大穴が開き、三千八百トンの母船は均衡を失なつて、わずかに左に傾むき始めていた。

衝突事のショックで、甲板に出るためのタラップは吹っ飛んでいた。が、上部にハッチの丸い穴が開いているのが見えた。

逃げ遅れた男は数人いた。ハッチの穴まで二メートル余の高さがあった。

そのうちの一人が、何の手掛りもない鉄の壁を登り始めた。あり得ないことだった

。次の一人が続いた。生きたいための一心だった。平べったい鉄の壁は、ほぼ直角に立っている。素手と素足だった。最初に登り切った男が、下の男に手を差し出した。男たちは救かった。

「壁があのおときなめになつてだんでねエベがア」と異議を差しはさんだ男もいたが、男たちの両手の爪は剥がれかけていた。

鉄の壁はほぼ垂直だったという。

「おらさだつて、こした鉄の壁ぐらいだば、よじ登れるべ」

白岩由吉は、人間いざという時は不思議な力が出るもんだと自分に言い聞かせた。

この鎮静房の最大の欠陥が、畳一枚の狭さにあることに気付くのに時間はかからなかった。一メートルほどの横幅しかない。

つまり、両手を一杯に広げると手が支えてしまう広さなのである。この鉄の壁をよじ登る不可能ではないと考えた。

が、天窓の構造がよくわからない。

真暗闇だった。

最初に投げ込まれた時に、例によってひとわたり観察はした。

この刑務所自体が木造建築物であったから、天窓の造りも木枠が組まれたものだった。ただ、余りにも、自分の背丈にくらべ、高い位置にあった。それで、その時は、天窓が弱点だとは気付かなかつた。

垂直に立つ鉄の壁、だれだつてよじ登れるはずがない。試みに彼は、両足を一メートル幅の鉄の壁に掛けてみた。

両手の指を一杯に開き、鉄の壁を押し、自分の体を上にと持上げようとした。

だが、三秒とは支えていられなかった。

この鎮静房に入れられてから二カ月を経過していた。一カ所に閉じ込められているのだから腕力も衰えていた。

闇室になつてからは、雑役夫の差し入れる食事時だけがわずかに光が入り込んだ。それも小さな出し入れ口だけからの光である。闇の中で、ムシヨめしをかつ込み、汁碗の冷めた味噌汁を一気のみ込んだ。

彼は、逃げるために先ず膂力（りよりよく）の回復を図つた。

腕立て伏せを四、六時中やつた。

看守の足音を耳にすると、いつも正座して待つた。殊勝らしく、反抗的態度を詫びるための上申書を書かせてくれと頼み込んだ。

「ここから出してくれとは申しませんが、闇室にだけはしないで欲しい」と、いう頼みだった。

上申書の提出は認められなかったが、改悛の情ありの報告はなされた。

ただ、闇室のままの状態は二月半ば頃まで続いた。もちろん懲罰房にいるのだから入浴など認められていない。彼はもう四カ月ほども自分の顔すら見ていない。

髪も髭も伸び放題で、饅えた自分の体臭だけを嗅いで過ごした。

やつと三月に入ったある日、明り通りの窓の蔽いだけが外された。春未だしの薄ら

陽だったが、やっと彼は闇室から解放された。明りが射し込んだだけで、なぜか命が救われた気がした。

彼は一冬を鎮静房の中で過ごしたのだ。

寒い冬をこの鉄の檻の中ですごしたらおらは死ぬー

その恐怖感にはじめはつき動かされていが、北海道の冬を長年の土工人夫ですごしたためか、ともかく、彼は凍傷にもかからずに一冬を越した。

なんのために？逃げるのか？

闇室の中で、彼が凝視し続けたものは、憎まれ口を叩く看守や、ヤキを入れる機会を待っている鬼の看守共の顔ではなかった。彼の眼には見えなかったが、看守共の背後で威張り散らしている人間がいることを彼は知っていた。

ある時は、それは、海軍の力を借りて、国策の名の下に、カニ漁場で漁夫たちをこき使い、虐待してきた鬼の監督の顔にもなった。

二十四時間ぶっ通しで働らかせたタコ部屋の鬼政という名の親方がいた。

背後にはちゃんと警察がついていた。

期日までに完成しないと鉄道省のお偉いさんのお出でに間に合わないーみんな、権力者の手先で、人間の命なんて何とも思っ
てはいなかった。

ここのやつらだって同じことだ！弱い者を虐めたら どういうことになるか、その結果を彼は思い知らせ てやりたいだけだ

った。

（あとしばらくだ。ほんとうの春が来たら、おらは鳥のように、ばたばたと大きな羽音を立ててここから飛んでやる！）

彼はその日を指折り数えた。頭の中にはすでに破獄の手順が用意されていた。危険を含んでいた。

だがやるしかない。

極限の状況におかれればおかれるほど、彼は度胸が据わってくる男であった。

3

四月の声を聞いたばかりのある日、白岩由吉は、最後の術（て）を使うことにした。戦争に勝つまでお前は鉄の箱に入っているんだなと、看守の一人が言った。

「この鎮静房なら絶対に逃げられない。お前は厄介者だからどこも引き取り手がなかった。」

そいつを、うちが貰い下げてやったわけだ」とわけ知りのことを言う看守もいた。

口に出しても聞き入れられないから言わなかったが、実は、東京・小菅刑務所に彼はもう一度戻して欲しいと考えていた。

小菅刑務所から、秋田刑務所に移されたのには理由があった。いまも彼は肛門の奥深くに万年筆のキャップの部分加工した「隠し筒」を隠し持っていた。

そのキャップの内側には十円札が二枚、

小さく折りたたんで詰め込まれていた。雑居房暮らしをしていた彼は、羽振りのきく迫田（さこだ）という男に見込まれた。

とても女役というタイプではなかったが、小柄なことからアンコ役にされた。

実はカニ工船に乗っていた時に、男ばかりの世界のことで、少年だった彼は同じような経験をしていた。

刑務所内の同性愛者同士の隠語でカップは男役、アンコは女役の意味である。

だれからせしめたのか、迫田は、愛するアンコのために彼に隠し筒を持たせてくれた。十円札一枚で男の体を迫田に売った。

洗濯物の干し場にシーツの大物が並ぶと、どこかに死角ができる。洗濯物を取り入れる番に回ったわずかの時間に、コンクリート壁に押し付けられ、彼は迫田の張り切ったものを受け入れた。

元はこの男もアンコで、刑務所暮らし三年でカップ役に回った。

女役の関心を買うためにカップの男たちは官給品や差入れの品などをアンコにくれてやるようになる。

アンコ役をやり刑務所の中でもの持ちになると、決まって今度はアンコ役の男はカップ役になる。もので相手を釣る。

この理屈はシャバの男と女の関係そのものであった。

その初めての相手が、白岩由吉だったのである。三度、彼はつき合い、二枚の十円札を隠し筒付きで手に入れた。

が、三度目に見張りの看守に発見されて、二人の仲は引き裂かれた。迫田が、密告者（チンコロ）がいると言って暴れた。

小菅刑務所から秋田刑務所に送られたのはこの一件が一つの引金になっていた。

だが、彼は隠し筒に現金を忍ばせていた。妙な行為に及んだお陰で、改造された万年筆のキャップは、いつも内肛の中程に止どまっていた。

入所時には四つん這いにさせられ、肛門は指まで突っ込んで調べられる。中途半端な場所ではだめだった。隠し方はその迫田という男に教えられた。看守の手の届かぬ場所にまで取り込むのである。

やつと明りの射し込んだ天窓のあたりを見ていたら、ある日、天井の隅に、蜘蛛（くも）の巣が張っているのが見えた。

「ああ、あの蜘蛛の糸がここまで下ってきたら」と思った。

蜘蛛の糸に縋（すが）って天窓のある場所まで登れるはずはない。

ただ、そう考えた。

天窓まで鉄の壁をよじ登る。蜘蛛の糸を伝って―それは暗闇の中で考えたことだった。が、一匹の蜘蛛はほんとうに一本の糸を操り、す―と降りてきた。

「こいつは縁起がいい。天窓の場所まで上って来いと蜘蛛は自分に語りかけているのだ」といように彼は解釈した。

「よし、お宝の十円札を使おう」とその時、彼は決断した。

彼は、よれよれの十円札を一枚隠し筒からとり出し、雑役夫が食事口に顔をのぞかせるのを待った。

朝から胸がどきどきした。

雑役夫がみんな自分たちの仲間とは限らない。出所間近かな者が多いから、看守に報告すればそれだけ点数が増え、出所も早くなる。密告者もいた。

が、これは運を天に任せるしかなかった。今日の当番は年配者の雑役夫だった。

どうせシヤバに出ても身寄りもなければ、働らき口もないはずだった。彼はそう読んだ。金の力を信じた。食事が差し入れられた時、十円札を先に差し出す。

「これが礼だ。三寸位の釘ごと一本ど、葉書ぐれえの大ききのブリキ板ごと一枚頼む

」

さつと十円札は持ち去られ、代りに食器の乗った木の盆が食事差し入れ口の木台の上におかれた。

返事はなかった。畜生！ただどりか！
口の中で眩やく。

承知したなら、とんとんと飯台を叩くことだつてできるのにと彼は考えた。

三寸釘とブリキ板、この二つがあれば逃げられると彼は確信していた。

三度の食事時を何度も待った。年配者の雑役夫はなぜか二日に一度は姿を見せていたのに、現われなくなった。

雑役夫がやって来る足音を聞きたびに、扉の近くに、にじり寄った。窓も何もない

。ただ外からのぞける視察孔（シキテンマド）があるだけだった。

四日目の朝、少し足を引きずるこの老雑役夫の足音を、彼は聞き取った。

よし！ その気配を感じとった時、彼は残ったもう一枚の十円札を手に握り締めていた。彼の全財産だった。

食台が入ってきた。同時に、雑役夫が小声で言った。食台の上に釘が置かれた。

「釘だけしかねえ」

「駄目（まいね）え。これで、どうしても、ブリキ板ごと手に入れてくれ」

小さく折りたたんだ十円札を、また、彼は、男の手に握らせた。十円札を握り締めた手が素早く引つ込んだ。

鎮静房のある建物の入り口近くには、鍵束を手にした看守が立っていた。

十円札は男の手に渡った。やはり、男を信ずるしかなかった。この頃の金の値打ちで言えば、十円あれば料亭に上がって、派手な芸者遊びがやれるのだった。

十円札二枚は、今の金にすれば、ほぼ十万円にはなる。彼は一本、五万円の値につき三寸釘を手にしていった。

これが通常の独居房なら、なんとか、鍵を開ける工夫をするのだが、鎮静房は外に大きな南京錠が掛けられているので、どうしようもなかった。

半開にされた天井の明り通りの窓から、舎房の一隅にだけ光がこぼれていた。

「釘一本があ」

弱々しく彼は眩やいた。

だが望みがないわけではなかった。

広い刑務所の構内のことだからブリキ板一枚ぐらい手に入らないはずはなかった。木工場や、鍛冶場や、被服工場などがあるのだから、作業場に入入りするのとができればブリキ板は手に入るはずである。

彼は舎房の一隅の便器の木桶を見ていた。二本の針金でよじった箍（たが）がニカ所、楕円形の木桶を締め付けている。その箍の喰い込んだ回りに、五センチ幅のブリキ板が嵌め込まれていた。

二本よじりの針金が、このブリキ板には強く喰い込んでいる。こいつを外すしかない。と思った。

が、手元に引き寄せ、箍に手を掛けたが外れるものではなかった。

排泄されたものの湿気と匂いが染みついた。木桶は水分を吸って、外にと膨張している。その分、箍（たが）は強く締まっていた。人間の指の力では外すことなど無理だった。

あきらめて、また舎房の隅に戻した。

彼が、ブリキ板を必要としているのは、それで特製の鋸（のこぎり）を作ろうとしていたからである。これは吉峯勇蔵に、教えられたものだった。

中士別（なかしべつ）原野の山崩しの工事現場で一緒に組んでいた仲間の一人が事故死し、その責任をとらされてオン

コの大樹に縛りつけられた。

その時、吉峯勇蔵に助けられた。

特製の手作り鋸で、縄を解いてもらったことがあったのだ。ブリキの板と三寸釘で彼は、破獄のための鋸を作るつもりだったのである。

まだ一婁（いちる）の望みはあった。

雑役夫に渡した十円札の効力を彼は信じた。が、次の日の朝、食事差し入れ口から、十円札が戻されてきた。

「むりだあ」東北訛（なま）りだった。

小さく折られたまかれた十円札は食器の下に隠されていた。

「頼むじゃア」そう声をふり絞ったが、男の手は拒否を示していた。

ぱたんと木蓋の扉が閉まった。

十円札が戻ってきたことに、この男の誠意のほどを見てとるべきだった。

誠心誠意探したにちがいないと思った。ふつうなら十円札は戻っては来ない。東北人の律儀さを見た思いがした。

やはり、便器の蓋を外すしかなかった。通常の独居房なら毎朝、列を作って汚物を捨てに行かされるのだが、鎮静房では一週間に一度だった。

その分、汚物は木桶にたまり、湿気も含むことになる。

この日から、彼は小便は、鉄の壁に向って放った。コンクリート床に垂れ流したのである。汚物を捨てに行った翌日から、努めて彼は水分の摂取を押さえた。木桶が乾燥すれば、隙間が生ずる。

そうすれば、箍（たが）の針金を外すことができると考えた。乾いて隙間ができるかどうか疑問だったが、やってみるしかなかった。

二日、三日は、自分の汚物をコンクリート床に直接まき散らすだけの徒労に終わった。が、腕力にかけては彼は自信があった。四日目、きっちり合わさった木片と木片の間にわずかだが隙間ができた。

三寸釘が、接合部分に入ったのである。生乾きになった木桶は三寸釘の太さ分だけ何カ所かの隙間を作った。

この穴は元には戻らなかった。
穴のまわりは乾燥が早かったからだ。

五日目。

斜めに、箍の針金部分に三寸釘を突き立てて行った。かなりの指の力がなければできない技だった。下手をすると三寸釘だつて曲がつてしまう。

が、丹念に、彼は箍をこじ上げて行った。ブリキ板に喰い込んでいるよじられた二本の針金の跡が問題なのだった。

その喰い込み部分さえ外せば、あとは平べったいブリキ板の下方の部分に箍をずりおろしていけばいいのだった。

木桶の構造は、下の部分ほど狭められている。箍は少しずつ緩んだ。

箍は上下にニカ所ある。彼は上の部分の針金に狙いをつけた。

だが、数時間かけたが、まだねじり目のついたブリキ板からは離れない。

一度あきらめ、今度は木桶の型をつく

ついている合わせ板を拳を固めて内側にと突いた。一枚分の木片が外れれば、あとは、ばらばらになる。底を足で踏み抜くことも考えた。

が、まだ昼間のことで大きな音がするにちがいがなかった。拳で突いてみたが、思い切り踏ん付けられない限り無理だった。

メッキが剥げ、錆びたブリキ板は一カ所がぼろぼろになり腐蝕していた。

彼は、その弱った部分を三寸釘の先でつき崩して行った。丁度、籬の針金部分の下あたりにも腐蝕部があった。

突き崩していくうちに、締め付け部分のブリキに隙間が生じた。腐蝕部は何カ所かあった。指で、巻きついた針金を下方にと力一杯に押す。少し動いた。

もう必死だった。五日間水分を吸っていないのだから、木肌も少し乾いていた。確実に、針金部分は下にと押されていた。下方に行くほど窄（せば）まった構造だから、満身の力を指先に込めたら、針金は浮き、下にとずれた。

「やった！」彼は快哉の声をあげた。

針金の中に指が入った。底まで楕円形の籬は落ちた。すっぽりと抜けていた。

輪っかになった二・五センチ幅の銅金だった。鎮静房にいと幸いなことに捜検はほとんどない。隠すものも、隠す場所もない場所だったからだ。

壊された便器は、明日の朝になれば、外に持ち出さなくてはならない。

丁度一週間の日が経っていた。

脱獄を決行するのは今夜しかなかった。すでに何度か練習のために、縦穴の鉄の壁を足先の力と腕の力だけでよじ登った。四肢で自分の全体重を支える。全力をふりしぼればなんとか、天窓まで辿り着ける 自信がついた。

彼は先ず、平べったいブリキ板に三寸釘で中央に一直縦に穴をあけた。

便器はもうばらばらに解体されていた。

その木片の一つで釘の頭を打ちつけた。

ブリキ板は手に持ちやすい十二、三センチの長さにする。

釘の穴は十五カ所ほど開けた。

穴の部分から二つに折った。縦長のブリキ板は折られた部分が、鋸の刃のようにぎざぎざになった。

夜が来るのを待った。

この鎮静房に投げ込まれて五カ月以上が経過している。看守たちの夜の見回りの時間はすべてわかっていた。

四月五日、月明りが天窓から洩れていた。ブリキ製の鋸と、籐の針金、三寸釘を身につけ、鉄の壁を一匹のやもりのように彼はよじ登った。

足の裏と掌に吸着盤でもついているような身の軽さであった。

何度かの試行錯誤の結果、鉄壁を登りやすい方法を考えついた。

上衣を脱ぎ二つに裂く。

少し湿らせて足裏に巻きつけた。

鉄の壁は足の裏の油ですべる。それを

防ぐために考えた方法である。足の力で蹴り体を持ち上げると同時に五本の指で鉄の壁を搔いた。

ずり落ちないために足の親指で自分の体重を支える。湿った布がずり落ちるのを防いでくれた。

天窓に手が届く。

木枠が嵌まっている。

ガラスは部厚くて割れそうになかった。そのことは計画を練った時に計算に入っていた。鋸で、ガラスの嵌められている木枠の一部を切断すれば、ガラスは外れるはずだった。

まさしく超人的な力であった。

両手と両足だけで鉄の壁をよじ登るなど想像を絶していた。彼はニメートル余の鉄の壁を一匹の蜘蛛のように張りつき登ったのだった。

天窓にとりついてからも大変だった。

梁（はり）の棟木（むねぎ）がわたされていた。その梁に片足をかけた。

窮屈な姿勢を強いられた。

かなりの力を要した。

天窓に横に張りつく恰好になった。

ブリキを二枚折りにした鋸で、少しずつ、天窓の 枠木を切っていた。ガラス一枚分の木枠を外せば、頭は出る。

四十分ほども要した。

手足が痺れてきた。

木枠の材質は硬い。

ニカ所の木枠を切断したらガラス板が動

いた。片手で持ち上げ、そつと横にずらす。アクロバットの時間が終わったとき、もう、手の力をほとんど失なっていた。

最後の危険なアクションに賭けた。

猿が木から木へと渡るように、一度片手でぶら下り、反動をつけて、もう一方の手で、天窗の木杵を掴んだ。

同時に懸垂の要領で、上体を持上げ、足で空を蹴った。

一本かつぎ上げると七十キロはある。

肉体労働で鍛えた体には苦もなかった。

一連の動作だった。

まかり間違えば、下に落ちる。

必死だった。

彼は硬い材質でつくられている杵木のお蔭で五十六キロの体重支えることができた。鎮静房は第五舎の外れにあり、鎮静舎房の先には看守詰所があった。

が、白岩由吉は高見の場所にいた。三メートルの高さがあったが、獄舎には外に向けて鉄格子の窓が張り出しているのも、その上に足を掛け、地上に飛び降りた。

赤煉瓦塀に沿って走り、工場のある西側の一角までたどり着く。材木工場の隅には、木材どころの秋田らしく、まだ、伐採され、運び込まれたばかりの檜（なら）材が積まれていた。一本、かつぎ上げると、七十キロはある。

三メートル余の赤煉瓦塀の壁に、その断裁された巨木を運び、立てかけた。渡り木の道ができていた。

塀を越え、暗闇の中にと、白岩由吉の姿はもう消えていた。

4

みちのく路には春の花が咲き乱れていた。梅と桜が一緒に咲き、少しおくれで、こぶしの白い花が咲いた。

秋田刑務所側は、躍起になって白岩由吉の姿を追ったが、まるで行方が掴めなかった。

脱獄した者はきまつて自分のふるさとに足を向ける。それで青森県を中心に捜査網が張られた。

また、蟹工船に乗っていたこと、土工人夫としては北海道の開発工事などに携っていたことから北海にも地の利ありと判断された、青函連絡船の発着場には、特に人員が配置された。

昭和十七年のこと、内外の事情はかなり逼迫（ひっぱく）したものになっていた。

この春の四月十八日には、米空軍が日本本土を初空襲し、太平洋一帯の制空権をすでに手に入れようとしていた。

ミッドウェー海戦で日本側が大打撃を蒙ったのもこの年のことであり、八月七日には日本の制圧下にあった南洋諸島の一つ、ガダルカナル島に米軍が上陸を開始した。

戦意の昂揚と、耐乏生活、みんなの眼

は、国の命運を賭けた大戦に向けられていた。

刑務所側にとつても不名誉なことであったから、脱獄魔白岩由吉の名は外には発表されることなく終った。

その頃、白岩由吉は、みちのくの一人旅をのんびりと楽しんでいた。

季節もよく、どこに野宿するのにも楽だった。それでも用心して、はじめは山岳地帯を夜歩き、昼間は樹陰で眠っていたが、段々と大胆になった。

追手の姿など、どこにもなかった。

自分を虐待した秋田刑務所に一泡吹かせたことになるが、逃げ了せてしまおうとなにか拍子抜けした。

身は自由になったものの、いきなり鎮静房に放り込んだ連中にはまだ充分の報復をしていなかった。

眼の前から、自分の敵がいなくなると、とたんに、自分自身の存在がとても小さいものになったように思えた。

。おらは超人的な力で、あの鉄の壁をよじ登った男だぞ。

草の上に寝そべって空を見ている時には、広い空に向って語りかけた。

村に出て人と擦れ違うと、このおらが脱獄魔の白岩由吉だ。とつい声を掛けたくなった。

だが、うららかな春の自然も、見知らぬ人々も、ただただに彼を無視し続けた。前に、青森刑務所を脱獄した時は、街

中が大騒ぎになり、捜査の人員も街に溢れた。地元の新聞が書き立てたので、この時以来、脱獄囚白岩由吉の名が知られるようになった。

古釘一本で簡単に舎房の錠を開け、塀の外に出る時も、通用門の南京錠を開け、逃走した。

その大胆不敵さが話題になった。

もう一つ、この時の脱獄にはエピソードがあった。脱獄予告をしてから逃走したと、あとになって面白おかしい話が作り上げられたのである。

経緯はこうだった。放射状のかたちをした中庭の運動場で三十分の運動時間をとっている時、隣りにいた男が金網越しに、「おら好きな女ゴごと、おいできたはんで、しんぱいで気さわりのせえ」と声をかけてきた。

「ここごと逃げ出せばええでばア。かんたんだでばな」と白岩は答えた。

男は「ふん」と鼻先で笑った。

からかわれていると思ったのだった。

それで、彼は調子にのり、

「あすとは言わねえ、今夜、おら逃げるはんでな」と男に宣言した。

その時、すでに、彼は、その夜に脱獄することを決めていた。

その男との会話はタイミングが合っていただけのことであった。お陰で、青森刑務所では有名になった。

運動場で会話を交わした男に脱獄宣言を

してからの実行行為だったからである。

白岩由吉という男は、ちよつと陰気な感じの目立たぬ男だったのに、刑務所仲間からは特別視されることになった。一週二度の入浴日でも、「あれが白岩由吉だ」と囁やく声が聞え、なかにはちゃんと挨拶を送ってくる者もいた。彼はすっかり箔（はく）をつけたのである。

いま、春の陽気に誘われて、西の方角を彼は目指していたが、すでに、自分の行動の行きつく先を考えていた。

秋田刑務所からの脱獄の記事が、どの新聞にも出ていず、完全に彼の英雄的行為が無視されていることが我慢ならなかった。破獄するのに、ほぼ半年間も要した。自分でもあの暗い巣穴を飛び立つことができたのは奇跡に近いと思っていた。ちよろい錠前をいともやすやすと解錠したのとはわけがちがう。

抜け出て、天窓の上に立った時、体中がぞくぞくとし震えた。

あれがほんとうの武者震いだと思った。

「おらはやったぞ！」

その一言の勝利宣言をするために彼は危険な、不可能に近い行為に全精力を傾むけたのだった。

脱獄ではなく、破獄だった。

やり遂げたことに快感があった。

それなのに、彼の大胆不敵な挑戦のことをだれも知らない。

彼は無視されていた。

彼は、福島県の磐梯山の近くまで来ていた。徒歩でここまで来た。食糧は畑のものを盗んだり、食糧倉庫に忍び込んだりした。衣服も持物もそれなりに揃えた。隠し筒の中の残りの十円札はもうとつくに使い果したが、新たに十円札が二枚加えられていた。

畑の野荒しをし、馬鈴薯などを町家に持込むとすぐに食糧品は買手がついた。金はあつたが、絶対に、鉄道の駅には近付かなかった。鉄道に乗りたくなる誘惑心を避けるためと、人出の多い場所には顔を見せないことを心に誓っていた。

秋田刑務所を抜け出してから、三カ月後、白岩由吉は巧みに監視の目を逃れながら、鉄道便なども使って、首都・東京に姿を現わした。

昭和十七年六月半ばのことであった。

梅雨の晴れ間で、東京は、もう初夏を思わせる強い陽射しに灼かれていた。

春の陽射しの中をおよそ秋田から六百キロ近く、彼は自分の足だけで歩いてきた。すっかり陽灼けし、がっしりした体軀が一層に逞しくなっていた。

一度は秋田刑務所を出たあと、故郷の青森に足を向けた。が、敵地に乗り込むように避けた。

西に下り、福島に出た。磐梯山の裾野で野宿した時、、小菅へ帰ろうとと考えた。どこと言つて彼には帰るところはない。

満天の星のまたたきを見ているうちに

、ついつい涙がこぼれた。

あまり彼は人に親切にされたことがない。親の愛にも薄かった。

ただ、小菅刑務所にいた一年半は、刑務所生活の中ではいちばん人間関係がうまくいっていた。地方の刑務所とちがつて施設もしっかりしていたし、規則さえ守ってれば、それなりに服役態度は評価してくれた。

図書係になり、生れてはじめて本を読む機会にも恵まれた。元木所長とも直接口をきくことができ、彼は元木所長の慈味溢れる人間性にも触れることができた。

それに、仲を割かれた迫田への思いもあった。同性愛者同士には特別の感情の通い合いがある。迫田の心配りのお陰で、彼は小菅刑務所ではかなり快適な時間をもつことができたのだった。

カツパとアンコの関係を裂く時、どちらか一方が相手を嫌いになって、仲を解消したがっているという術がよく使われる。刑務所側は厳に同性愛を禁じている。

別れ話や、三角関係のもつれなどで刑務所内で刃傷沙汰が発生した例は数多いのだった。

白岩は、迫田が嫌いになったのではなかった。刺激的な行為にもまだ愛着があった。おらから裏切ったのではない。

そのことがわかって欲しかった。

同性愛の現場を押さえられたことで刑務所側の圧力に屈し、秋田にとばされること

に同意したとは思われたくなかった。

強制的に仲は割かれたのだった。

軍関係の作業に従事のためと送り状には記されたが、一度も秋田刑務所では作業に従事したことはなかった。

同性愛者に対する締付けもあってたぶん彼は、いきなり、鎮静房に放り込まれたのだった。同性愛の性癖がある上に、脱獄常習者、隔離しておくのがいちばんだと当局の人間たちは考えたのだ。閉鎖的な刑務所生活を、十年ほども経験してきた彼にとつての自己主張の場は、同囚の仲間たちでしかなかった。

小菅刑務所にもどれば、彼の赫々たる秋田刑務所破獄の事实は、刑務所中に知れわたることになる。迫田に対しても顔を立てることができた。

彼は智能にも秀れていた。

都新報社という新聞社を直接訪ねた。

自分の破獄のニュースを売ったのだった。二十円を手に入れた。

もちろん、新聞社の便所を借り、隠し筒のキャップの中に小さく折りたたみ、うまく装填（そうてん）した。

当然のことながらキャップには針金を巻き、油紙で包んだ。次のために備えた。

新聞記者とカメラマンつきで、六月十一日、白岩由吉は、直接、小菅刑務所の正門の扉を叩いた。自首して出たのである。彼が心服し、慕っていた元木所長は府中刑務所所長に栄転していたが、一躍、白岩由吉

は稀代の脱獄魔として名を上げた。

記事をスクープした都新報社が三面記事に仰々しく書き立てたものだから、負けじと東京中の新聞が白岩由吉の脱獄記をのせた。

小菅刑務所に収監される前に、白岩由吉は、秋田刑務所での処遇のことを新聞記者に喋りまくった。

「あのままならば、おらあ、殺さでだに、ちげえねえべ」

得意顔の男の顔があった。

この出頭騒ぎで、秋田刑務所側は大恥をかくことになった。

ことの次第をばらされた。

秋田刑務所所長をはじめ、関係職員は「秋田刑務所のひどい扱いを訴えるために脱獄してきた」と訴えた白岩の発言のためもあって、全員が処分をうけた。

白岩の恋人であった迫田は、三カ月も歩いて、白岩に会いに来たと聞いておいおいと男泣きした。

嘘もまじった話だったが、男同士の真情だけは通じたのだった。

半年余り白岩は逃走加重罪の裁判を受けるために小菅刑務所にいたのち、二年の加重判決を下され、確定後、網走刑務所に送られることになった。

その網走で、また、白岩由吉は脱獄魔としての名をあげることになるのであった。